神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Guided to the lakes : William Wordsworth and nineteenth-century literary tourism

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2012-12-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Yoshikawa, Saeko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1359

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

出願者　　吉川朗子
論文題目　“Guided to the Lakes: William Wordsworth and Nineteenth-Century Literary Tourism” (湖水地方へ ― ウィリアム・ワーズワスと 19 世紀文学観光)

博士論文審査の要旨

吉川朗子氏は、これまで William Wordsworth の初期の抒情詩から後年の *The Excursion* に至るまでの代表作について、入念な解釈を展開してきたが、本論文では、詩人の故郷の土地への関わり方を、さらに詳細に検証し、彼が「湖水地方のアイデンティティ形成」に果たした役割の意味を見きわめようとする。そのために膨大な量の一次資料が参照されているのだが、ガイドブックや回想録から小さな旅行記事や広告に至るまでを対象とするその議論が決して冗長に流れないのは、氏の明確な問題意識があればこそだろう。こうした歴史的背景を踏まえた議論は、結果として、評価の分かれがちな Wordsworth 晩年の詩風についても貴重な視座を提供しえている。以上の理由で、本審査委員会は本論文が学位請求論文として高い価値をもつものと判断する。

論文審査結果

プロローグともなる第 1 章では、ワーズワスの死後 3 か月余りという早い時期に、ある画家が詩人ゆかりの地をたどりながら、100 枚以上に及ぶていねいな素描を残したエピソードが紹介され、分析されている。おそらく詩人の作品を深く愛し、その成立事情にも通じているとおぼしいこの未詳の画家のスケッチ群の提示を通して、単に作品と風土の密接な関わりにとどまらず、詩人と同じ風景を眺め、同じ土地を踏みしめてみたいとの止みがたい願望を喚起する力が、ワーズワスの詩の核心にあることが巧みに示唆されている。

続く第 2〜3 章では、第 1 章のエピソードを受ける形で、特に 19 世紀に隆盛を見た、いわゆる「文学観光」(Literary Tourism) の実態について、数多くのガイドブックや名所案内、旅行記などの資料にあたって、ていねいで周到な分析が展開される。

まず第 2 章ではイタリア伝来の「ピクチャレスク旅行」の衰退と並行して、身近な作家の足跡をたどる旅行の流行があったことに触れると共に、もともと古典文学への言及をもたぬ平易な表現を重視するワーズワスの詩風が受け入れられやすい素地が当時の読者層の中に潜在していたことについて、明確な指摘がなされる。そして第 3 章では、こうして徐々にブームとなった「ワーズワス巡礼」が、批評界では一旦落ちこんだワーズワスの名声を、いわば大衆レベルで維持し、やがて 1870 年代の再評価の機運を生み出すもととなったことについて、慎重で説得力のある議論がなされている。作品評価において読者の存在がもつ重要な意義を、幾多の資料をもとに丹念に論証してみせている点は、特に高い評価をもつものと言えよう。

第 4〜5 章では、ワーズワスが子ども時代から晩年までのさまざまな時期に住んでいた、湖水地方の 4 つの家を取り上げながら、観光地としての人気の変遷と詩作品への評価の変

化の間に見られる相関関係をさぐろうとする。

第 4 章では、詩人の晩年の棲処ライダル・マウントの家が、とりわけワーズワスの存命中は、彼自ら庭の案内役をしたことなどもあって、観光客の人気を集めていたことが語られる。だが詩人の死後、1860 年代に入ってこの家が門戸を閉ざすようになるにつれて、詩人の若年期のもっと小じんまりとした住居「ダヴ・コテージ」が次第に人気を高めていく。そこには批評家マシュー・アーノルドによるワーズワス青年期の作品への高い評価もかかわっていたはずだとする著者の推測は、十分な説得力をもとう。第 5 章では、詩人の自伝詩『序曲』の人気を反映して、彼の生家にまでも観光客の足が向かうに至る経緯が分析される。こうして、むしろ「孤独」を好んだ詩人が大衆的な支持を得るについては、土地に寄せる詩人の愛着がいかに大きな役割を果たしたかが、明快な論述によって、詳らかにされている。

第 6〜7 章は、前章で扱われたワーズワスの大衆による受容のプロセスの実際の姿を、さらに多くの資料を参照しながら、できるだけ具体的なイメージとして捉えようとする。

第 6 章では、ますます増加する観光客の期待に応える形で、湖水地方の地元民によって、たとえば湖畔の岩や黄水仙などが詩人の記念碑として聖別化されていくと共に、良くも悪くも「自然の風景」がある種の「文化的風景」に変貌していく様子がたどられている。さらに第 7 章では、挿絵入りのガイドや風景画集の流行が「ワーズワスの湖水地方」というイコンの普及に拍車をかけ、それらが流行の浮薄さという一面を露呈しながらも、たとえば後に「ナショナル・トラスト運動」に結実するような自然保護思想の涵養にも貢献した点が周到に論じられている。

最後にエピローグとして、20 世紀初頭に早々とワーズワス巡礼を果たした高木市之助の例に触れながら、土地との有機的な結びつきをもつに至った「言葉」の底力に、あらためて読者の注意を喚起する形で、議論が閉じられている。

以上概観したとおり、本論文の特筆すべき長所は湖水地方とワーズワスに関する膨大な数の資料・文献に粘り強くていねいに当たりながら、どこまでも当時の状況や事実の解明に徹しつつ、そこから同時代の読者にとっての風土体験の意味や詩人晩年の詩風の変化などについて考察を進めるための貴重な土台を構築しえている点にあるだろう。今後のワーズワス研究やロマン主義一般の歴史的位置づけをめぐる議論に資するところは、きわめて大きいと思われる。その意味において、本論文の学問的価値の高さは疑いを容れないと言えよう。

最終試験結果

最終試験は 2012 年 10 月 6 日午後 2 時から三木記念会館で実施され、御輿哲也(主査)、新野緑、光永雅明、西川健誠の 4 名の本学教員と大阪大学の小口一郎准教授が審査にあたった。審査は公開でおこなわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後、各審査委員が論文に関する意見や感想を述べると共にいくつかの質問をして、申請者がそれに回答する

形式で進められた。

審査委員からは、「ピクチャレスク美学」とワーズワス作品の関わりや、次第に増大した読者でもある観光客の社会階層の問題、さらには一見単調にも映る晩年の作風がもつ意味についてなど、多様な質問が出されたが、それらに対する申請者の的確で誠実な回答ぶりは、各委員を十分に納得させるものだった。

公開審査の終了後、各委員がそれぞれの見解と評価を述べ合い、話し合った上で、本論文が博士論文として十分な成果をおさめたという点での合意が得られ、申請者の最終試験の評価を「合格」とすることが決定された。